

## 旧厚見郡下佐波村 慶応3年(1867)の御札祭りの史料を読もう

### 今回読む史料について

青木久太郎家文書は、元文4年(1740)から明治初年まで、厚見郡下佐波村の庄屋を務めた青木家に伝えられた文書群で、現在岐阜県歴史資料館に収蔵されている。本講座では、同文書の「文久三年癸亥年 二番歳々諸事村用留帳 七月ヨリ 青木久八郎扣」から慶応3(1867)年の「御札祭り」の記事をテキストとする。

「二番歳々諸事村用留帳」は、幕末から明治の青木家の当主が村政の重要事項や村の出来事・事件を主としながら、家業や家族にかかる事項も含めて、編年順に書き留めたもので、文久3年(1863)7月から明治21年(1888)までの出来事が記されている。これに先立つ「一番歳々諸事村用書留帳」は、天保11年(1840)3月から始めて文久3年7月までの記録となっている。

### 「御札祭り」と「ええじゃないか」について

幕末の慶応3年(1867)の7月14日の三河国渥美郡牟婁(むろ)村を皮切りに、周辺の村々で神仏の御札や仏像などが天から降ってくるという不思議な出来事が(実際は誰かが降らせたのだが)続いた。御札降りがあると、家や村・町でこれを祀り二夜三日の臨時祭礼を行った。大量の酒や肴、菓子を用意し参詣人に振舞った。参詣人は揃いの衣装で集団で参拝したり、手踊りで踊り込むなど大騒ぎが繰り返された。熱狂と喧騒の「ええじゃないか」騒動の始まりであった。

御札降りと臨時祭礼の騒ぎは三河国吉田宿を起点に東海道沿いにまたたく間に拡大し、東は江戸まで達した(11月下旬)。西では、名古屋の御札降りが8月28日にあり、以後11月上旬までに3,400余の札が降るといふ大流行が起きた。名古屋では札の降下があるごとに七日七夜の祭礼が行われ、祭礼は延々と続いた。名古屋の熱狂は尾張各地や北隣の美濃、中山道沿いに信濃、甲斐、東海道を西に伊勢、京都、大阪とへと波及し、山陽道を広島まで、四国も土佐室戸あたりまで伝播した。伊勢以西の西日本においては「ええじゃないか」の囃子言葉を唱えながら鳴り物を加えて乱舞したことから、一般にこの社会現象を「ええじゃないか」と呼んでいる。

熱狂と喧騒の中で、札の降った富裕層に接待を強要したり、村役人層に休日を要求するなどの行動が広く見られ、中には打ちこわしの行動に走る例もみられた。また長州賛美や幕府の退潮を歌い、それらを「ええじゃないか」と肯定して熱狂的に踊り続ける行動には、閉塞する封建社会への不満をはきだしつつ、幕末という変革期にあって、世直しへの期待がこめられていると見る向きもある。江戸幕府崩壊期の最重要期に重なることから、討幕派の政治的策謀により引き起こされた社会現象との主張もかつては行われたが、現在では「あったとしてもごく限定的」との見方が一般的のようである。

一部の地域では、翌慶応4年6月にも降下がみられたが、ほとんどの地域で鳥羽伏見の戦い（慶応4年1月3日～6日）を境に急速に収束に向かった。

### 美濃の御札降り

美濃では9月1日の多芸郡船付村（養老町）が始めとされ、以後、同月10日に長良村（同月晦日まで。岐阜市）、同じ頃方県郡洞村（岐阜市）、羽栗郡竹ヶ鼻村（羽島市）でも降り、中旬に武儀郡上有知村（美濃市）、16日土岐郡柿野村（土岐市）、同じ頃羽栗郡笠松村（笠松町）、27日に大垣城下、池田郡杵井村（池田町）、武儀郡洞戸村高見（関市）と続き、29日に本講座で取り上げる厚見郡下佐波村の御札降りが発生する。東濃の御札降りは、10月が中心、最後は土岐郡柿野村（土岐市）の11月26日であった。

名古屋では御札降りに伴う臨時祭礼を「御札祭り」と称しているが、美濃でもこの名称で呼ぶところが多かった。青木久兵衛（久衛）の「慶応三年二番諸事日記帳」（青木久太郎家文書）には、「天降神祭」「天降諸神祭」という呼称もみられる。

### 史料の語句解説

祓串 伊勢神宮で祓に用いる玉串。細い木に細かく切った紙片をつけたもの。

名号 仏・菩薩の名。尊号。とくに「阿弥陀仏」の四字名号、「南無阿弥陀仏」の六字名号のほか九・十字などの名号をいう。

直像 立像のことか。あるいは「画像」の誤りか。

畔（くろ） 付近。あたり。

四つ荷 一荷は天秤棒の両端にかけて一人の肩に担える分量をいう。一荷で酒樽2本。

坪内 中庭

村中八幡宮 下佐波村下佐波の八幡神社を指す。古来佐波三郷（上佐波、中佐波、下佐波）の総社として信仰され、総社八幡宮、本村八幡宮とも呼ばれた。旧下佐波村には、このほか領毛の八幡宮、坂巻の神明宮、須原宮があった。

羽袴 「羽織袴」のこと。

にわかおとり 「にわか踊り」については、辞書では「その場で即興的に演じる滑稽な踊り」あるいは「俄狂言の中でおどる踊り」とあるが、「にわか」と「おどり」と考えれば、俄芝居と手踊りということになる。

汲呑（ぐいのみ） ぐいと一気にのむこと

大はり 「大割り」のこと。「木、特に香木などを大きめに割る、ぜいたくなやり方をする」との意味がある。

切立 「裁立て」の意で、「衣服の仕立て下ろし」をいう。

<参考文献> 田村貞雄『ええじゃないか始まる』青木書店 1987

田村貞雄「岐阜地域の「ええじゃないか」」『東海近代史研究』1991.12

その他 県史・市町村史など